

一ノ瀬綾

生き継ぎて



一ノ瀬綾
生き継ぎて



筑摩書房

一ノ瀬 綾 (いちのせ あや)

1932年、長野県に生れる。1969年、小説「春の終り」で第12回農民文学賞受賞。

1976年、「黄の花」で第16回田村俊子賞受賞。新日本文学会会員。主な著書に『黄の花』『遠い朝』『独り暮らし』『それぞれの愛』がある。

生き継ぎて

一九八五年七月二十五日 初版第一刷発行

著者／一ノ瀬 綾

発行者／布川角左衛門

発行所／株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話東京二九一一七六五二(営業)

二九四一六七二一(編集)

振替東京六一四二二三

郵便番号一〇一―一九一

印刷／多田印刷 製本／矢嶋製本

Printed in Japan ©一ノ瀬綾 1985

0093-80255-4604

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

生き継ぎて

そろそろ出勤しようかと腕時計に目をやった時、部屋隅の机の上で電話のベルが鳴った。小沢由布子は軽い舌打ちで化粧台のスツールから腰を上げた。最近やたらとかかってくる電話セールスの、押しつけがましい女の声音を思い出す。昨日の朝も今頃だった。

「はい」

知らずにつっけんどんな声になる。受話器にひるんだような沈黙が流れ、

「……由布子かい？」

かすれた女の声がした。思いがけなく、祖母のふじだった。

「アラ、おばあちゃんだった。ごめんね、きつい声出して……」

「よそへかかったかと思ったよ」

「出掛けるところだったもんで、つい……久しぶりね、元気だった？」

「ああ、丈夫でやってる。今年はいつまでも寒くてな、まだ山の雪が消えないよ」

「気にしてたの。カゼ、引かなかった？」

由布子はつとめて優しく言った。正月に電話しただけで忘れていた自分に気が咎めた。同時に、

こんな時間に電話してきた祖母の意中が判らない。ちらっと不安がかすめた。

「どうしたの？ 急用？」

「いや……そういうわけじゃない。ゆうべ、電話したんだけど、留守だったよ」

「ああ……午前サマだったから。夜中だっていいのに、遠慮することないでしょ」

「わたしやいいけど、由布子は勤めがあるからね。忙しいんだろ？」

おもねるような口調に、由布子は、祖母の言い出しかねている気配を察した。

「いつもバタバタしてるのよ。おばあちゃんの用事なら、夜中だってかまわないのに……なにかあったの？」

「……少し相談事が出来てなァ。一度、逢えないだらうか。由布子の顔も見たいよ」

「相談事なら、お母さんの方がいいわね」

「いや、いいんだよ、初江に用はない」

早口でふじは、あとじさるように言った。相変らずよそよそしい祖母と母親の関係を、由布子は改めて思い起こす。

「田舎へ行くように言うわ、わたしから」

「由布子が忙しけりゃ、すぐでなくていい」

ふじの口調はかたくなだ。

「なら、おばあちゃん、上京なさいよ。もう二年も来ていないじゃないの」

「ありがと、嬉しいよ。でも、年寄りがこのこ行ったら迷惑かけるだけだ。由布子が来るのを待つよ。夏には、きっとおいで……」

ふじは用件など忘れたふうに、三カ月も先の八月の話をした。浅間山麓の高原の町は、まだ桜の花も咲かないというのに。

「出かけるんだらう？　またかけるよ」

そそくさと電話が切れた。茶の間のこたつの脇で、受話器を置いたまま、ぼんやりしている祖母の貌かまが目に浮かんた。六十六という歳の割に髪は黒いが、細面で肉の薄い顔は皺が深い。二十余年間、独り暮らしを通したせいだ。

用向きを告げなかった祖母の態度が、由布子の胸に放っておけない気掛りを誘い出す。時計は出勤時を二十分近く過ぎていた。遅れついでにと、母への電話を思いつく。

二年前までは、由布子もいっしょに住んでいたマンションのダイヤルを廻した。数回のコールの後で、母の明らかに寝起きと判るくぐもった声が出た。

「まだ寝てたの？」

「カゼ気味だね……頭が痛い」

「大丈夫？　電話、悪かったかな」

母は、ぐずんと涙はなをすすった。

「起きようと思ってたときよ。店で邦子さん辞めたからね……これから出掛けるわ」

「無理しないで、休んだら？」

「このまま寝てたら、店がつぶれるよ」

引きつれた声で母が笑った。最近美容院経営も大変らしいことは、由布子も知っている。

“都内の美容院数、一万四千六百九十一店。十年前より約三千店増えた。ここ数年は毎年千店近く

がオープン、逆に約七百店がつぶれるという乱戦時代……」

そんな記事が新聞に載ったばかりである。母の苦勞は判っていたが、うかつなことは言えなかった。「大変ね」などと口にしたら、母はすかさず、「あんな店つぶれりゃいいと思ってんだろ、お前は……」などとイヤミを言うにきまっている。店のことには触れず、いきなり切り出した。

「おばあちゃんから、電話があったわ」

母は押し黙ってから、受話器に吐息を洩らしてよこした。

「……たった今よ。相談事があるんだって。お母さん、田舎へ行ってあげて」

「どうして、いつもお前ん所へかけて来るんだらうね、あの人は」

由布子の言葉をひたたくような言い方だった。それには乗らず、

「行けなかったら、電話ぐらいしてあげて。駄^{から}でも悪くしてたら大変じゃない」

「……工合、悪いってかい？」

「判んない。でも電話ですまない用向きらしいわ。とにかく、一度行くべきよ」

「由布子に電話して来たんだろ。お前が面倒見てやりゃいいのよ」

押し返すように母が言った。むっとして、思わず声が強くなる。

「順序ってもんがあるでしょう。わたしが面倒見るのはお母さん。おばあちゃんの事は、あんなの責任でしようが」

「あんな？ なによ、親に向かって……」

「子は、親のコピーなの」

「へらず口ばっか！」

「とにかく電話して。任せたらね」

断ち切るように受話器を置いてしまった。これをきっかけに、祖母と母の仲が少しでも和らいでくれたらと思う。もの心つく頃から二十四の今日まで、由布子はずっと二人の間で気を揉み続けてきたような気がする。

母への電話を切ったその手で、再び受話器を取り上げ、勤め先のダイヤルを廻す。

「はい、ダウンタウン通信、編集室です」

歯切れのいいソフトな声音は、編集長の野口弘子とすぐ判る。由布子は手短に事情を話し、十分ほど遅刻しそうだと言った。

「これから家を出るところです」

「そう……じゃ、直接仕事先へ行ってくれない。午後の予定だった竹本加代さん、インタヴュー早くして欲しいって、今電話あったの。急用で留守にするんですって。そこからだと九時には行けるでしょ、TELしとくわ」

てきばきした野口弘子の指示は、もたついていた由布子の気分を一変させた。ショルダーバッグを肩に引っかけながら、足早にアパートを出る。六畳に三畳分の台所とトイレが付いた間取りで、部屋代四万円。二階の角だからもう五千円欲しいという不動産屋で、ねばって負けさせた。上下に八つの部屋が並んでいる。

このアパートの取りえは、地下鉄の駅に近いことだ。二軒先の路地を右へ折れて大通りへ出ると、すぐ鼻先に駅の入口がある。

由布子は、軽い足さばきで階段を降りて行く。紺のジーンズに白いコットンのジャケットを羽織

り、胸に黒いＴシャツをのぞかせたスタイルは気に入っていた。クセの無い髪は、無造作なボブにしている。手間も金もかからなくていい。顔を上げ、背を伸ばしてさっさと歩く。せめて気分だけは一流ジャーナリスト。

由布子が勤める「ダウンタウン通信」は、発行部数七千そこそこの月刊ミニコミ誌である。スタッフは女ばかりが三人。野口弘子の他に、津田好美が居る。男っ気は、週に一、二度顔を出すフリーのカメラマン一人だけ。

だから仕事はなんでもやらなければならない。企画宣伝、取材編集、印刷手配、配布から回収、広告取りや集金……。

「ダウンタウン通信」は、下町の中心地帯に広がる商店街が主なターゲットだった。百数十店が加盟する会員制のＰＲ誌で、編集室は、その街の商工会議所の一角に間借りしていた。

乗り替えなしの地下鉄で二十分ほど。地上へ出て十分ほど歩くと、国電の駅を中心にして左右へ広がる商店街が見えてくる。

今日の訪問先は、繁華街からだいぶ離れた住宅地である。戦災で焼け残った古いしもた屋に住むお年寄り、竹本加代の話を訊き出すのが目的だった。「我が町おぼえがき」このシリーズは十二回目で、由布子の企画である。就職して三カ月後の初仕事だった。写真入りの記事に人気があって、今では「ダウンタウン通信」の目玉的存在でもある。

「おかげで、一般家庭の購読が一割近く増えたわ。タウン誌の面白さは、これね。あんた、いいセンスしてるじゃない」

野口弘子に褒められた時は嬉しかった。彼女は三十二歳で小学校二年になる娘の母親である。由

布子の大学の先輩でもあった。卒業時に希望した出版社に入れず、アルバイト先を転々としていた頃、野口弘子に声をかけられた。

「自力で始めて六年になるミニコミ誌よ。一人辞めちゃって困ってるの、手伝ってくれない。多少は勉強になるかもよ」

ゆくゆくは、ジャーナリストを目差していた由布子は、すぐその気になった。アルバイトのつもりがいつしかはまりこみ、一年半が過ぎた今は、手がけた企画に愛着を持つまでになっていた。

ようやく五月らしくなった爽やかな風に頬をなぶらせながら、由布子は軒の低いしもた屋の並ぶ家々を見て歩く。すぐ前後には四、五階建のビルや新しいモルタル造りの建物が迫っていて、その路地の一角だけがひっそりと肩を寄せ合っていた。今年の秋には一掃されて、高層マンションが出現する予定地だ。

買収に住民の反対が起き、最後まで頑張ったのが竹本加代だった。「この家はわたしの歴史、金では売れないよ！」と業者にタンカを切ったと伝え聞いて、来月号の訪問者に選んだのである。

下町の裏通りには、どこを歩いても左右の軒下に所せましと鉢植が並んでいる。どんな粗末な小鉢にも水遣りのあとがあり、陽差しを追って出窓やブロック塀の上にまで鉢が並ぶ。路地のはずれの小さな二階屋の前で、由布子は足を止めた。古びて黒ずんだ板壁と、出窓に取り付けられた木格子が、それなりに手入れされ、小ざっぱりしたたたずまいである。入口のガラス戸の横に、表札が出ていた。「竹本健次」、脇に並んで「加代」と書いてある。夫の名前なのだろうか。

「ごめんください」

ブザーが無いので、声をかけてからガラス戸を開けた。せまい三和土に、ビニールのサンダルが

一足、ぼつんと揃えてあった。紺木綿の暖簾で仕切った廊下の奥から、着物姿の老女が現われた。思ったより小柄で、物静かな印象である。名刺を出して、来意を告げた。

「午前中になんて無理言つて、すみませんでしたね」

竹本加代は、口許に柔和な笑みを浮かべて会釈した。瘠せぎすな体つきも髪の色も白さが加減も、祖母のふじによく似ている。出がけの電話のせいかな、そう思った。由布子は竹本加代に初対面とは思えない親しみを覚えた。玄関脇の茶の間に招じられる。畳も家具も古いが、丹念な手入れのあとが見える四畳半だ。

「竹本さんは、お一人ですか？」

仕事の上では、どんな老婆でも気安くおばあちゃん、と呼ばないことにしていた。話題にメリハリを無くすのが嫌だった。

「ああ、表札ですね」

小さなテーブルの上で茶を淹れながら、竹本加代はすぐに気がついたふうにうなずいて、

「健次は息子です。世帯持って、大阪で暮らしていますが、名前だけ出しとくんですよ。年寄り一人じゃぶっそりで、つけこまれますからね……」

目尻の皺を深めて笑った。娘が一人、これは千葉市内に嫁いでいて、午後からそっちへ手伝いに行くことになり、急に変更連絡したのだと要領よく話す。

「息子は四十七、娘は四十二にもなるのに、なにかというと、当てにされて……」

「いっしょに暮らされないんですか」

「まあ、身動き出来るうちは、と思つて頑張つてますがね、トシだから大阪へ来いと、うるさいん

ですよ、息子が」

由布子は、祖母と母と自分の關係を思った。いっしょに暮らそうなどと、祖母に声をかけたことがあっただろうか。

「お若く見えますけど、お幾つですか」

「ちょうど七十ですよ。いつまでつばつていられるかって、孫達が賭をしてるそうです」

「わたしの祖母は六十六ですけど、竹本さんの方がお若く見えますよ」

田舎暮らしの祖母より、アカ抜けているせいかな。世辞ではなかった。

「一人暮らしの方が、性に合ってるんですね。生活費は主人の遺族年金でやってられるもんで、気楽です」

「ご主人はいつ頃亡くなられたんですか」

「戦死ですからね……四十年も昔のことですよ」

由布子は、えっと息を引いた。祖母と同じ境遇ではないか。夫の年金を受けているとすれば、再婚はしなかったのだろう。祖母と同様、女手一つで戦後の困難を切り抜けてきたのか。由布子は因縁めいた思いで、すぐには次の問いが出なかった。竹本加代は、手にした湯呑を見つめながら、

「わたしが、この家に嫁いだ頃は、舅夫婦も健在でね、隣近所はみんな似たような暮らしぶりでした。家では主人も舅も腕のいい木挽職人こびきでしたから、木場で働きさえすれば食うに困らず、呑気な明るい家庭でしたよ。夫が召集されて戦争がきびしくなり、わたしは昭和十九年の暮れに子供二人を連れて栃木の実家へ疎開しました。それが舅夫婦との生き別れになったんです。三月十日の上空襲で逃げ廻り、二人共焼け死にました。家だけ残ったのが皮肉ですが、おかげでわたしは、戦後す

ぐ東京へ出て来れたんです。八つと三つの子供を抱え、何度、隅田川へ身を投げようと思ったか知れませんがね……」

独白めいた口調をふっと止め、竹本加代は窺うような視線を由布子に向けた。

「あら、ごめんなさいよ、こんな面白くもない昔話をくどくどと……」

「いえ、昔話だなんて、とんでもありません。実は、わたしの祖母も戦争未亡人で、子供二人連れて長野の実家へ疎開したんです。母からの又聞きですから不確かですけど、大変だったようです」
由布子は感情的になるまいと声を抑えて応じたが、胸の底には熱いものが泡のように湧き上がってきた。長い間忘れ去っていた祖母にまつわる記憶が、切れぎれに甦ってくる。竹本加代は身をのり出した。

「そうですか……さぞご苦労されたでしょう。六十六、でしたね、お元気ですか」

「ええ、田舎で、独り暮らしをしています」

「やっぱり……その気持、判ります。わたし達未亡人は、すぐ身につまされるんですよ」

竹本加代は声をつまらせた。そして急に打ちとけた表情になり、

「あなたになら、安心して苦労話ができそうな気がします。孫達はもう、誰もうるさがって、わたしの話など耳を貸そうとしません。二階に取ってある古いミシンも、見かけるたびに息子や嫁が捨てろ、処分しろと、うるさいんです。そのミシンが、母子三人の命の綱だったんですがね……」

二階もこの部屋も人に貸して、わたしは脚が折れるほどミシンを踏んで、敗戦直後の地獄を生き抜きました。口に出せない辛い目にも遭いましたけど……。この家と、路地がわたしを守ってくれたんですね。他人の仕立物や町工場の下請け仕事の布地を抱えて、どれほどこの路を往復したとか。

どうして売る気もないのに追い立てられなきゃいけないのでしょ」

「竹本さんは、反対理由に、その事を話されたんですか」

「こんなふうに言ったのは初めてです。あんまり一方的だから、厭だと断ったら、話に尾ヒレが付いて、タンカ切ったなんて……」

竹本加代は苦笑した。息子も娘も売る方に賛成で、業者といっしょになって責めたてたという。

来月の始めには手続きが終り、二カ月後には引越す予定だと言って、肩で小さく息をついた。

「息子さんの方へでも行かれますか」

「いえ、都内で、アパート借りようかと思ってますよ」

「大変ですね、えらいですわ」

「いえ、この町に未練があるのね……」

由布子は話題を変えて、路地と周辺の街を結ぶ幾つかの思い出を引き出して、インタビューのしめくりにした。

「あなたのおかげで、少し胸のつかえが降りましたよ」

改めて熱い茶を淹れ替えながら、竹本加代はすっかり心許した口調で言った。

「わたしは、竹本さんにお逢いして、急に祖母の顔が見たくなりました」

「田舎へ行つてあげなさいよ。孫は可愛いもんです。憎まれ口きかれても、すぐ忘れて電話かけたり……。うちは、男の子ばかりのせいかな、あんまり甘えてくれませんが」

「また、昔のお話、聞かせて下さい」

自然な気持で由布子は言った。祖母からも母からも知らされていない何かを、この竹本加代は語

ってくれるかもしれない。戦争未亡人……自分で口にした言葉が、今頃になって由布子の心の中へ深く重く沈み始めていた。帰り際、竹本加代を表に誘い、家と路地をバックに、スナップを四、五枚撮った。

「雑誌が出たら、持って来ますよ」

「たのしみしてます。ここを去るいい記念になるでしょう」

竹本加代に見送られて路地を出ながら、由布子は胸の裡でインタビュー記事のまとめにかかっていた。原稿用紙三枚分の文章と、写真を配したレイアウトはすぐ決まる。カットを工夫して、少し丁寧に扱ってみよう。

編集室へ顔を出したのは十一時近くだった。野口弘子が一人、窓際の机で電卓を叩いて伝票の集計をしていた。

「ご苦労さん……」

ショートカットの髪型が似合う、小ぢんまりした貌を由布子に向けた。小柄だが色白で、ふくよかな手をしている。気さくでおだやかで、ミニコミ誌に七年も打ちこんできたバイタリティは、どこにも見えなかった。

「津田さんは？」

由布子は、自分の机にバッグを置きながら、同僚の空き椅子に目をやった。時折連絡もなく休むクセのある彼女だった。

「今日、三丁目のパブ喫茶『ママ』の開店でしょ。彼女、記事書いて雑誌置いてもらうんだって、すっとなでったわよ」